

共にあることの哲学と現実

家族・社会・文学・政治

フランス現代思想が問う〈共同体の危険と希望〉2 実践・状況編

岩野卓司編

岩野卓司
合田正人
郷原佳以
坂本尚志
澤田直
藤田尚志
増田一夫
宮崎裕助

書肆心水

共にあることの哲学と現実 目次

序 共同体論を実践するために 岩野卓司7

I 家族

家族への信

■デリダと絆のアポリア21

宮崎裕助

現代社会における愛・性・家族のゆくえ

■ドゥルーズの「分人」概念から出発して39

藤田尚志

II 社会

雑種たちの共同体を求めて87

澤田直

「合理性の共同体」の存続のために

■哲学的思考と教育113

坂本尚志

III 文学

宮沢賢治のアセファル共同体

■共にあることと宗教147

岩野卓司

「すべて」をめぐる断片の運動

■ブランショにおける共同体の(非)実践的射程187

郷原佳以

IV 政治

国家と社会の「あいだ」をいかに(反-)造形するか

■レヴィナス、ブーバーとユートピア的社会主義の明日229

合田正人

喪のポリティクス

■デリダ、「私は死で動いている」の射程275

増田一夫

序 共同体論を実践するために

われわれは二〇一六年に論文集『共にあることの哲学』を出版した。これは「フランス現代思想が問う〈共同体の危険と希望〉」の第一巻であり、各人がフランス現代の思想家を取り上げ、共同体についての彼らの思想がどういうものであるかを論じたものであった。そこでは、澤田直がサルトルとナンシーを、岩野卓司がバタイユを、湯浅博雄がプランショを、合田正人がレヴィナスを、増田一夫がデリダを、坂本尚志がフーコーを、藤田尚志がドゥルーズを担当した。この書の目的は、共同体について理論的に探究することであった。さて、第一巻の序で予告したように、「理論編」の後にこの「実践・状況編」が続くことになる。どうしてこの第二巻を続けたかというと、それは現代の世界や日本の状況を考えるために、現代思想の共同体論が参照可能かどうかを見極めるためである。フランス現代思想にはもう三十年以上も前に書かれたテクストも多く、すでに思想の「古典」と化しているものもある。そうであるが故に今日の状況を論じるには適さないと主張する者も少なからずいる。こういった批判に答えるためにも、思想の現代における有効性を検証する必要があるのだ。

この「実践・状況編」では、「共にあること」についての「理論編」の成果を何らかのかたちで反映させることにした。もちろん、「実践・状況編」はそれだけで独立したものであり、「理論編」を読んでいなければ理解できないというものではないし、「実践・状況編」にのみ寄稿する論者もいる。しかし、各論者が「理論編」で取り上げた思想家から汲み取ったものを実践に反映させたという点では、全員が一致していると言える。われわれは理論をただ解釈することだけには満足していないのであり、理論の実践的な有効性をもふくめて思想の価値としたいのであ

る。

実践への問い

どうして「実践・状況編」が必要かを説明するために、ニーチェの「神の死」から語り始めよう。『華やぐ智慧』のなかの「狂人」という断章で、ニーチェは「神の死」について語っている。真っ昼間、頭の狂つた男が提灯を片手に広場にやつてきて、「俺は神を探している」と繰り返し叫んでいる。広場でこの男は人々にさんざんからかわれ物笑いの種となつた。そうすると、彼はあたりを睨んでこう述べる。「神がどこに行つたかって。俺がお前たちに教えてやろう。俺たちが神を殺したんだ。俺たちはみな神の殺害者だ」と。「狂人」が黙つてあたりを見回すと、みな沈黙して不思議そうな顔で彼を見つめた。彼は自分が早く来すぎたことを悟る。誰も神が死んだことに気づいていなかつたのだ。

この断章は、二十世紀に入り、多くの人が言及し解釈してきた。「神の死」は、今日の哲学、宗教、科学、芸術に多大な影響を及ぼす出来事だったと言えるであろう。ヤスパース、ハイデッガー、バタイユ、ブランショ、クロソウスキイー、フーコー、デリダなどが、それぞれのやり方で「神の死」を深く思索していくのだ。

この「神の死」を今日の人文科学の研究にスライドさせて考えてみよう。

一般的に言つて、文系・理系を問わず、大学の内外を問わず、およそ研究者なる存在は研究会や学会なるものとかかわっている。もちろん、これらの組織は小さい私的なものから、日本を代表したり、世界をまたにかける規模のものまでいくつもある。人文系の研究では、ある個々の作家や思想家についての研究が多くなされており、フランス現代思想の思想家と呼ばれる者たちもすでに研究の対象になつており、サルトルやバタイユは言うに及ばず、フーコーやデリダに至るまで研究会はすでに世界的規模で存在し、国際シンポジウムも頻繁に開かれるようになつてきていている。

こういつた学会やシンポジウムに、ニーチエの「狂人」のような者が闖入したらどうであろうか。もちろん、死

SAMPLE
ShotShinji.com

んだのは神ではなく、当該の思想家である。たぶん、広場に居合せた人々のように誰も相手にしないであろう。小馬鹿にして冷やかにせせら笑うかもしれない。バタイユでもフーコーでもいい、その思想家についての学会が開かれ、シンポジウムが催されるのは、その思想家が研究に値する重要性をもつてゐるからであり、何年も研究してすみずみまでテクストに通じてゐる研究者や、生涯をかけて翻訳をしてゐる者たちにとって、「俺たちが殺害者」などという戯言は、とうてい理解できないであろう。

それでは、「狂人」のように、研究会で「バタイユは死んだ」とか「ブランショは死んだ」とか叫ぶことは、まったく意味のないことなのであろうか。研究者たちがバタイユやブランショを殺害したというのは、まったくの的外れな言葉なのであろうか。だが、よく考えてみると、そこには幾分かの真実が含まれてゐるようにも思われる。例えば、バタイユやブランショのように「主体の消滅」について語る思想家のテクストを取り扱うとき、研究者はどうするのであろうか。たいていの場合、その思想家のテクストを読み、その言葉の意味を解釈し、彼の意図を明るみに出しながら作業を進めていく。こういった解釈学的な読解を前提にしながら、例え、思想の背景を明らかにしたり、伝記的な事実による実証に向かつたり、思想史的な意義を説明したりする。しかし、そこでおこなわれるのは、「主体の消滅」について語る者の「意図」を白日のもとにさらすことにして他ならない。言ってみれば、「主体の消滅」について語る者の「主体」を露わにしていることなのだ。これは思想家の主張を尊重していることで、逆に彼を裏切つていてことになるのではないのだろうか。だから、逆説的であるが、思想家を「殺害している」とも言えるのではないのだろうか。

近年、わが国でも課程博士の制度ができ、人文科学の研究においても博士論文の量産体制が確立している。それによつて、フランス現代思想についての研究もすすみ、各思想家についての精緻な博士論文もいくつも誕生している。その事実は称賛すべきものではあるが、逆に博士論文というアカデミックな制度は、古典的な解釈と実証を強いるものであり、この点で、フランス現代思想の思想家たちが踏み越えようとしたアカデミックな制約のなかに、研究者たちを連れ戻してしまう可能性をはらんではないのだろうか。「狂人」の予言と重ね合わせれば、精緻で優

秀なフーコー論やデリダ論が、あまりに見事に「フーコー殺し」や「デリダ殺し」を実演している事態になつてゐるのではないのだろうか。

もちろん、研究なるものが対象となる思想家の主張や方法に忠実でなければならぬということではない。当該の思想家とはまったく異なる視座からのテクストの読解によつてすぐれた成果をあげた研究を、われわれはいくつも知つてゐる。例えば、ブランショ研究で名高いクリストフ・ビダンは、その伝記研究によつてブランショの多くの隠れた真実を伝えてくれている。ブランショはその批評の方法において文学空間における主体の消滅について語り、伝記的な文学批評を遠ざけている。それなのに、ビダンはブランショと正反対の方法を駆使することによつて、この思想家についての優れた研究を残してゐる。ブランショをブランショ風に論じなければならない義務はないのだ。だからこそ、多彩な研究が誕生し、思想家の隠れた多くの面が明らかになるのだろう。

しかし、ここで自覚すべきことは、研究をする者が思想家の殺害者であるという事実なのだ。われわれはバタイユやブランショを殺害することによつて、その遺産をわがものにしている。これは古典的な解釈に基づいた研究や、伝記的な手法による研究には限らない。構造分析であろうと、精神分析の援用であろうと、記号論であろうと、同じなのだ。極言すれば、解釈したり読解したりすることそれ自体に「殺害」の契機がはらまされているのではないのだろうか。しかも、それは無自覺のうちに行われている。たしかにこれらの研究は、多くの発見をわれわれにもたらしてくれるであろう。しかし、このことによつて彼らの思想を十分に受け継いでいると言えるのであろうか。「主体の消滅」を理論的に精緻に読解し、その意味や背景を明らかにしても、どこかそのことで十分に満足できないのは、そこに「主体の消滅」の何らかの実践が欠けているからではないのだろうか。そのことで、「殺害」の罪の償いができるいないからではないのだろうか。研究者のようなその思想家を一番よく理解している者のほうが、逆にその思想家から遠ざかっているのは、以上のような理由からなのだ。

これは現代の思想家たちから何を受け取つてゐるかの問い合わせている。「主体の消滅」についての知識を数多く受け取つても、彼らの思想を受け継いでいるとは言えない。「主体の消滅」を普通の意味で解釈するのとは別

のやりかたで実践することに、思想家が与えるものを受け継ぐ可能性が開かれているのではないのだろうか。こういった実践への問い合わせ、われわれは「理論編」のあとに「実践編」を加えるのである。

そもそも人は、思想家から何を受け取るのであろうか。それはその思想家が与えてくれるものであろう。ただ、そこには彼が意図して伝えようとしたものもあれば、知らず知らずのうちに伝えてしまうものもあるう。思想家が主張していることはもちろんのこと、彼の「無意識」もまたこの贈与と深くかかわっていると言えるだろう。フランス現代の思想家たちが理論的に示してくれたのは、それぞれの方法の違いはあるにせよ、作品の意味や作者の意図を超えたものの探求である。われわれもこういったレヴァエルにまで「受け取る」ということを考えていくべきでないのだろうか。例えば、デリダは「贈与」や「遺産」を意識に現前するものとしてはとらえない。「贈与」が意識に現前し「贈与」として認められたならば、この認知によつて受け手は贈り手に何かを返しているのであり、その場合「贈与」は「交換」になつてしまふからである。「贈与」は忘却されたものとしてしか考えられないのだ。しかもその忘却も想起可能なものであれば、やはり意識に現前することになり、同じように何かを返し、「交換」することになる。だから、この忘却は想起不可能なレヴェルのものであり、そういうふた次元で生起する「贈与」や「遺産」を彼は考察している。われわれの無意識より深いところで与えられ、受け取られることで引き継がれるものもあるのだ。

このように人はさまざま次元で受け取ることにさらされている。「理論」から「実践」に移ることによつて、さらに受け取りの可能性を広げ深めることができるのでないのだろうか。本書でも、各論者が各思想家から受け取つたものはバラエティに富んでいる。これは実践についての考え方の違いにも起因しているのだが、ある者は実践を社会的な文脈で語り、別の者は政治的な文脈で語り、またある者は思想史的な文脈のなかでの実践をおこなつてゐる。たしかにこういった試みは、実際に現実に共同体をつくるとする実践、例えばマルクスの言うような「革命の実践」とは異なるかもしれない。しかし、受け取つたものを何らかのかたちで応用し実践するという小さな試みを重ねることが、共同体をつくるという実践へとつながつていくのではないのだろうか。そのため、フランス

現代思想なるものが過去の遺物であるのか、あるいは有効な武器であるのかどうかを、ここで検証する必要があるのだ。

状況への問い合わせ

今日どうしてあらためて共同体について問うことが必要なのか。第一巻では、資本主義の限界と国家の限界から説き起こし、バタイユ、ブランショ、ナンシーの共同体についての問いとその系譜をたどりながら、その問いとの関係で「理論編」の各論文を位置づけた。「実践・状況編」では、違う角度から共同体を考えていくことの必要性について述べてみよう。

必要な理由はいくつもあるが、二つだけ触れておこう。

ひとつは、今日頻発する宗教テロである。このテロが共同体について考えなければならない必要性を喚起している。東西冷戦下では、過激派のテロは、共産主義革命の理念に基づいて、ハイジャックや爆弾闘争などをおこなっていた。しかし今日では、宗教の名の下でテロがおこなわれている。アメリカ合衆国における9・11の同時多発テロ、フランスでのシャルリ・エブド襲撃事件、パリ同時多発テロ、ベルギーでのブリュッセル連続テロなど、欧米諸国ではテロの嵐が吹き荒れている。また、自爆攻撃はシリアやイラクの戦闘地域だけではなく、これらの国々をはじめとするアラブ諸国全般においても猛威をふるつており、テロの犠牲者は欧米よりも多い。アルカイダやイスラム国のような過激なイスラム教徒たちによる攻撃に対して、欧米諸国は空爆によって報復する。欧米側は過激派の無差別攻撃をテロという言葉で表現してネガティヴなイメージをあおっているが、これは事実上の戦争ではないのだろうか。もちろん、国と国との戦闘ではない以上、厳密には戦争という言葉はあてはまらないかもしれないが、「テロ」という言葉が覆い隠してしまうものには気をつけなければならない。両者の「戦争」では、テロに対する空爆、空爆に対するテロ、そういったかたちで報復の連鎖は止まらない。ウサマ・ビン・ラーディンはアメリカの特殊部隊によって殺害されたし、アメリカ、ロシア、イラク、シリアの勢力による攻撃でイスラム国も崩壊して

いる。しかし、それだけではテロの根絶とはいかないことは、多くの識者の一致した見解である。ビン・ラーディンの後継者や崇拜者たち、あるいはイスラム国の理念を共有する者たちによって、テロが継続されるのは火を見るよりも明らかだろう。力の行使によって一時的な解決は可能かもしれないが、抜本的な解決はありえない。宗教的対立、政治的対立を越えて、どう和解を成立させるべきであろうか。そこには、欧米諸国における人種差別、イスラム教やその生活様式への無理解といった直接的な要因ばかりでなく、イスラム系移民と古くからの住民の対立、移民の流入が失業の原因だとする俗説の蔓延、失業や治安の悪化からくる国民の右傾化と不寛容、極右集団の台頭など、多数の問題が介在するだろう。また、中東のイスラム教徒には、パレスティナ問題でつねにイスラエルを支持しているアメリカへの反発、体制の維持のためそのアメリカに依存しているアラブの支配層への反発が、根本にある。こういった対立、差別、反発は暴力の連鎖によつては解決されない。そこには「交流」や「共同性」のレベルで解決を模索する必要があるのでないのだろうか。イスラム教、キリスト教、ユダヤ教の共同体のあいだの対話、各国の対話、そういったことはもちろん必要であろう。しかし、そういった対話と理解によつて、諸々の問題は解決するのであろうか。そこには、対話や理解の不可能さ、コミュニケーションの危機も同時にあらままれているのではないのだろうか。だから、こういった対話やコミュニケーションをも成り立たせる「共同性」、あるいはそれらを不可能にするかもしれない「共同性」について考えていくことで、ぎりぎりの接点が見えてくるのではないのだろうか。

もうひとつは、人間関係の変化である。今日、同性婚を認める国も増えてきているが、このことによつて、男性と女性による結婚という概念、それとともに家族の概念も問いただされている。さらには、生殖医療の発展により、代理出産や精子の冷凍保存が可能になり、同性愛カップルでも子供をもつことができるようになつてきていている。そこでは、父、母、子という性によつて役割分担された古典的な家族のイメージは変わつてきている。フロイトがエディプス・コンプレックスの着想を得たのは、この家族の概念を前提にしているからであるが、今日、LGBTを尊重した性の考え方や結婚制度によって拡張された家族関係においては、異なる精神分析の仮説が生まれてくる可能

性があるかもしれない。家族における「共同性」には、われわれのもつ伝統的なイメージはすでに合致しなくなっているのではないのだろうか。この家族の在り方の変化は、またがった形でも進行している。かつての大家族から核家族へと変わっていたのが、さらに今日では単身者の増加を招いている。二〇三〇年ごろには生涯未婚率は日本の全国民の三十パーセントに達すると言われている。これには若者の結婚観の変化、女性の経済的な自立、コンビニなどの便利な生活空間の充実などの理由が挙げられているが、一番深刻なのは資本主義の過度の競争が生み出した非正規雇用による貧困である。つまり、ワーキングプアの増加である。しかも、伝統的な家族觀も崩壊し、親戚とも疎遠になっているから、単身者は血縁には頼れない。孤立は進むばかりである。崩れているのは血縁ばかりではない。老人の孤独死が社会問題になっているように、近所とのつきあいも減っており、地縁もほとんどないものになっているし、非正規雇用の増加から会社での人間関係も希薄なものになりつつある。インターネットによるヴァーチャルな世界でのコミュニケーションは盛んになっているが、逆に現実の人間関係はますます薄いものになっているのだ。こういった孤立において「共同性」とは何なのであろうか。人はどういう共同体を考えなければならぬのだろうか。SNSによる共同体で充分なのであろうか。「血縁」、「地縁」、「社縁」が完全には失われていなかが変容しているという現実を踏まえたら、あらためて「共同性」と「共同体」について考えなければならないだろう。

今日ほど「共にあること」の不可能性と可能性が意識される時代はないのではないのだろうか。そういう時代における「共同性」の意味はどういうものなのであろうか。

構成

今回寄稿してもらった論者は、それぞれの専門の第一線で活躍している研究者であると同時に、「実践」や「状況」についても強い関心を抱いている者たちである。集まった論考は、各自の独自の「実践」解釈を踏まえてもので、各人の個性を十分に反映したものである。「実践」をどうとらえるかで考え方の違いがあり、そのため多少の不ぞ

ろいや逸脱があるとはいえ、本論文集は「家族」、「社会」、「文学」、「政治」の四つのセクションに分けることができる。その内容を簡単に紹介しておこう。

最初のセクション「家族」には、宮崎裕助「家族への信——デリダと絆のアポリア」と藤田尚志「現代社会における愛・性・家族のゆくえ——ドゥルーズの「分人」概念から出発して」がある。

まず宮崎は、デリダの考察をたどりながら、家族の絆がいかに自明でないかを探究している。ふつう人はこの絆についてDNA判定などによる生物学的なものを自明なものとして考えがちであるが、例えば父子関係で法的な関係と生物学的な関係が一致しない場合もある。また、母子関係は代理母などを考慮に入れると複数の母親の可能性があり、これまた自明なものではない。家族関係は「信」のうえに成立しているのをかかえていっているのだ。この論文を通して、宮崎はデリダを参照しながら、家族の絆のはらむアボリアの問い合わせを提起している。

次に藤田は、ドゥルーズの『アンチ・オイディップス』を出発点として、家族、性、愛について論じている。その議論の基盤にあるのは、「分人 (dividends)」という概念である。これは、それ以上分割できない個の単位としての「個人 (individus)」ではなく、内的にも外的にも絶えず分割され相互に反響しあう存在のことである。この「分人」に基づいて、藤田はポリアモリー、異種間関係、障害者の性、売春、コラボ消費、超個人主義、モノへの愛などの多数のテーマを考察していく、「分人主義」が「私有」に閉ざさないで、「共有」をベースにした「開かれた分人主義」になっていくことを目指している。

次のセクション「社会」の論文は、澤田直「難民たちの共同体を求めて」と坂本尚志「合理性の共同体」の存続のために——哲学的思考と教育——である。

サルトルとナンシーの影響を受けた澤田は、この論文で人は複数の共同体に同時に帰属しているという視点から、カップル、家族、地域、アソシエーション、学会、大学などについて考察し、複数の集団に帰属する場合のアインデンティティーの問題や单一の帰属性をもたない共同体の問題について論を進めている。これは複数の国籍をもつたり複数の民族に帰属したりする者たちについての問題提起につながっている。この考察をとおして素描され

るのは、複数性や雑種性を許容する共同体のあり方である。

一方坂本は、フーコーの権力論と生政治の考え方を背景にしながら、フランスの哲学教育を主題にして論じている。この哲学教育は合理的な認識を通しての共同体成員の育成を目指すものであるが、これは同時に共同体の体制維持にもつながっている。しかまた、哲学の批判機能は体制を破壊する危険性を伴っている。坂本は哲学教育において重視されている小論文作成法を精緻に検討しながら、諸刃の剣のようなこの二つの側面を発見し、それが共同体の変容を産み出す契機にもなっていることを指摘している。

第三のセクション「文学」には、岩野卓司「宮沢賢治のアセファル共同体——共にあることと宗教」と郷原佳以「〔すべて〕をめぐる断片の運動——ブランショにおける共同体の〔非〕実践的射程」がある。

バタイユが共同体について提示したアセファル（無頭）の概念を「脱中心化」として再解釈しながら、岩野は現代の宗教的過激派の思想に潜む「中心化」と「超越的な出来事」の問題をどう克服していくかを考えていこうとしている。そのため岩野が注目したのは、宮沢賢治による日蓮宗の田中智学の共同体論の読みかえである。天皇という「頭」をいただく智学の共同体思想を賢治がどう受け継ぎ、どう「頭」を抹消していくかを、イーハトヴ共同体と四次元思想という主題において彼は考察していく。

それに対して郷原は、ブランショが共同体論を発表した一九八〇年代より今日のほうが社会の危機が迫っているという認識のもとで、ブランショをどう読んでいくかの問題提起をしている。SEALDsがブランショの「無名性」などに無理解だったことを踏まえ、彼の政治活動のみを切り離すのではなく、彼の共同体論の理念的な面を実践に活かすべきだというのが、郷原の主張である。この面を掘り下げるために、彼女はこの思想家のなかの、文学的なものと政治的なものの、弁証法と非弁証法、断片と全体の二重性に注目している。

最後のセクション「政治」の論文は、合田正人「国家と社会の「あいだ」をいかに（反））造形するか——レビュアナス、ブーバーとユートピア的社会主義の明日」と増田一夫「喪のポリティクス——デリダ、「私は死で動いている」の射程」である。

合田は、新しい共同体とはどういうものであるかについて、ランダウアー、ブーバー、レビイナスについて議論を進めている。特に軸になつてゐるのがブーバーであり、彼のシオニズム、マルクス主義的ユートピアの思想、キリストへの評価、イスラエル国家への失望について語られている。また、ランダウアーの「民族」の思想のブーバーへの影響や、レビイナスのブーバー批判とその継承（「キブツ」や「リズム」）についても触れられている。合田はユダヤ共同体思想のユートピア性について考えを巡らせながら、パレスティナとイスラエルの今日的対立の根本にある問題を手繰り寄せようとしている。

また増田は、共同体を念頭においてデリダの思想をどう実践するかの課題を、理論と実践の二項対立を脱構築しながら挑んでいる。そのため彼はデリダのテクストに伏在する死や喪への関心に特に注意し、生と死の二項対立を脱構築しながら論を進めている。刻々と変化する社会情勢における忘却、リベラルな民主主義の機能不全などを『マルクスの亡靈』から問い直し、フッサールやハイデッガーの「事実」を『声と現象』などから読み直し、友愛を『友愛のポリティックス』から再考し、「私は死で動いている」というデリダの考えがいかに脱構築の実践において重要であるかを探っている。

どれも読みごたえのある重要な論文である。これらの論文の実践的成果が認められるかどうか、フランス現代思想が、今日の状況を踏まえながら行われる思想の実践に活かせるかどうか、それは読者の判断にゆだねたい。今後、さらなる「実践」の試みが広がっていくことを期待するしだいである。

フランス現代思想を化石のようにしたものにしないで今日の状況において問う材料にしたいという気持ちから、「実践・状況編」の importance をいちはやく認識していたのは、書肆心水の清藤洋氏である。本書の目的を理解しながら、つねに温かい励ましの言葉をいただいた。謝意を表したい。

岩野
卓司

序……共同体論を実践するために